



くすい箱

発行

桐生厚生総合病院 薬剤部

発行責任者 小林 真弓

編集担当者 渡辺 満寿美

大手 直樹

第44回目のテーマは、“経皮鎮痛消炎薬”についての紹介です。

経皮鎮痛消炎剤とは、痛みを感じる部位へ直接塗ったり、貼ったりすることで痛みや炎症を抑えるお薬です。皮膚の表面から薬の成分が吸収されて内部で広がり、痛みやこりの元となっている筋肉などに直接働きかけることで、筋肉痛や肩凝り、腰の痛み、膝の痛みを改善します。経皮鎮痛消炎剤には貼付剤（貼るお薬）と塗布剤（塗るお薬）があります。今回は、この2つの剤形についてご紹介します。

まずは、『貼るお薬』である貼付剤についてお話しします。

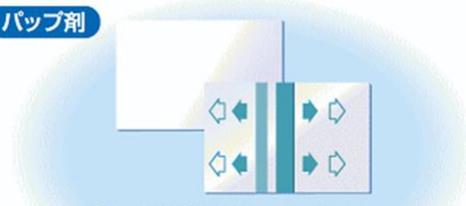
貼付剤について

貼付剤にはパップ剤とテープ剤の2種類があります。

①パップ剤

水分が多く含まれていて厚手なのが特徴です。
水分量が多いため肌への刺激が少なく肌荒れしづら
いですが、剥がれやすいことがあります。

パップ剤



※パップ剤の中には、ハッカやメントールなどが含まれていて冷感作用を示すものと、トウガラシエキスが含まれていて温感作用を示すものがあります。
冷感作用のパップ剤は冷蔵庫で冷やすと効果的です。
トウガラシエキス入りのパップ剤は唐辛子に肌荒れを起こす方は注意が必要です。

②テープ剤

水分を含まない基剤を用いているため薄手なのが特徴です。
脂溶性があり肌への親和性が高く剥がれづら
いですが、そのぶん肌荒れしやすいこと
もあります。
剥がれにくいので関節などの動きのある部位へ使用するのに適
しています。

テープ剤



★冷感・温感タイプの使い分けについて★

パップ剤、テープ剤それぞれに冷感・温感タイプがありますが、基本的に急性的な疾患である捻挫や打撲には冷感タイプ、慢性的な疾患である肩こりや腰痛には温感タイプが選択されます。医師の指示のもと、心地よい方を使うのもおすすめです。

次に、『塗るお薬』である塗布剤についてお話しします。

塗布剤について

塗布剤には、クリーム剤・軟膏剤・ローション剤・チック剤・スプレー剤があります。

① クリーム剤

使用感がよく、ベタつきが少なく伸びが良いのですが、汗で薬効成分が流れやすいため軟膏と比べると鎮痛消炎効果が持続しにくいこともあります。



② 軟膏剤

皮膚の保護作用や柔軟作用などに優れていて、どんな皮膚の状態でも用いることができます。クリーム剤よりも落ちにくく効果の持続性がありますが、クリーム剤よりもべとつきます。

③ ローション剤

アルコールでない液体（通常、水）に薬剤を混ぜたもので、使用感がよく伸びるので広範囲に塗布することができます。また、水分の蒸発による冷却効果も期待できます。容器から直接塗布できるので手が汚れにくいことも特徴です。



④ ゲル剤

液体にした薬剤をゲル（固形～半固形）状に固めてゼリー状にした塗り薬です。塗布後に乾燥して薄い膜となって皮膚に残るため、鎮痛消炎効果成分の吸収に優れますがクリームに比べると少しベタつきやすいことがあります。

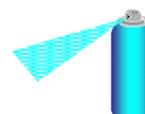
⑤ チック剤

ゲル剤をさらに固形状にしたものです。容器から直接塗布できるので手が汚れず、すぐに乾燥するので衣服にも付きにくい。しかし、固形状のため伸びが悪いのが特徴です。



⑥ スプレー剤

有効成分を霧状にして噴霧する製剤です。広い部位に対応でき、背中などの手が届きにくい部分にも塗布しやすい。容器から直接塗布できるので手が汚れません。冷却効果を有する薬剤もあります。



以上が貼付剤と塗布剤についての簡単な説明になります。

それぞれの特徴を知ったうえで、ご自分の症状に合わせて上手に経皮鎮痛消炎薬の剤形を選択してください。



光線過敏症について

最後に光線過敏症について、説明します。経皮鎮痛消炎薬の中には、使用後もその成分が少なからず残り、そこに直射日光があたると、過敏症のある方では、腫れたり、赤くなったりすることがあります。

使用後も、少なくとも4週間は注意が必要ですので、晴れた日だけでなく曇りの日でも濃い色の服（長袖やスラックス）やサポーターなどで、貼ったところを日光からさえぎって下さい。分からないことがあれば、主治医や薬剤師にご相談ください。



次回は、2017年9月発行予定です。